interview

インタビュー

根室市長

大矢快治氏

東方沖地震と これからの防災システム

続けてきた防災訓練と市民の意識が被害を最小限に

平成6年10月4日午後10時23分、就寝前のひとときを過ごしていた市民を震度5～6といわれる強震が根室市を襲った。自宅でくつろいでいた大矢市長は、尋常でない揺れにすぐ市役所に電話連絡をし、対策本部の設置を指示し自らも役所に駆けつけた。役所には緊急登庁の職員も次々駆けつけ、それぞれの担当分野の業務に就いた。緊急災害は時間との勝負という。過去最大のこの地震は果たして根室市に何を残していったのか。

地震の次は津波を警戒

―― 東方沖地震が起きたのは10月4日10時23分ですが、市長はその時どちらに居られたのですか。それとその時の感じはどうでしたか

大矢 自宅におりました。たまたま家内が入院しておりまして一人だったのですが、揺れ方が尋常でないと感じました。それですぐ戸を開けて揺れが一旦おさまるのを待ってから役所に電話をしましたら、ちょうどスタッフが夜勤をしておりまして、すぐ対策本部を設置するよう指示して駆けつけたわけです。職員も非常登庁でつぎつぎ駆けつけてきました。

―― 今回の地震が尋常な揺れでないと感じられて、次に思われたことは何でしたか

大矢 22年前、昭和48年に起きたマグニチュード8.2 の根室半島沖地震を体験していますから、震度3くらいまではそう慌てないですね。ただ根室の場合、地震が起きてすぐ対応しなければならないのが津波なんです。

花咲港に約2キロにわたって防潮堤を設置してあるのですが、津波の来襲に備えて52門のゲイトを閉めなければなりません。それが一番最初に頭に浮かびました。地震が起きた場合、すぐテレビで地震情報を確認して、警報が出ましたらただちにゲイトを閉めることになっています。この場合すぐ担当の職員が港に駆けつけますが、津波は時間とのたたかいですので、まず現場に連絡を入れて、委託している漁業組合など現地に常駐している人にゲイトを閉めてもらうようなシステムになっています。

―― この度の地震では亡くなった方がいなかったのは不幸中の幸いといえますが、被害額としてはどの程度になったのですか。

大矢 公共施設の被害がおよそ120億円で民間の被害が50億円、合わせて170億円強に上りました。金額も過去最高額に達しましたが、この地震の異常さは、墓石のほぼ90%が倒壊し、大正年代に造られた道路の石垣がくずれたことに象徴されます。これらは過去の地震にはびくともしなかったのです。

そのほか公共施設等の被害状況をみても、これまでに体験したことのない大きさだったと言えます。

―― ライフラインへの影響はどうでしたか。

大矢 一番困ったのは水道管の破裂ですね。下水道も合わせて150ケ所ぐらい破裂したのではないでしょうか。完全復旧までに10日かかりました。それまでの生活用水は給水車で配水したわけですが、市のものだけでは足りず自衛隊や釧路市からタンク車を借りまして対応いたしました。

水で大変だったのはもう一つ市立病院のスプリンクラーが破損して水が吹き出てしまったことです。ここは5階建なのですが、4階5階が水浸しになってしまったんです。それで患者さんを1階に移したり、20名ほど一時退院して頂いたり、ご不自由をおかけしました。

それと人工透析ができなくなってしまったことです。毎日13人程が透析に通われていたのですが、急きょ釧路市内の病院に搬送して急場を凌ぐ状態でした。震災ではいろいろ大変な状況が発生しますが、今回最も困ったのは水でしたね。

―― 災害復旧の進捗状況はどの程度まで進んでいるのでしょうか。

大矢 公共施設については、国また道から補助金を頂き、また借り入れをしなければなりませんが、そのために被害の状況をまとめ査定をして頂かなければなりません。一番最後に査定を受けたものが12月の中旬で、それが終わって議会に予算を提案し、その後発注となったわけですから、文化会館で3月の中旬に全面オープンになる予定となっておりますので、公共施設においてはほとんど年度内に修復が終了致します。

ただ一番被害が大きかった港湾と漁港、それと上屋等の付帯施設に関しましてはこの秋までかかるかと思います。

―― 復旧に関して出てきた問題はありましたか。

大矢 今回の地震は震度5、一部では6に近いと言われておりますが、同程度の地震が再度来た場合、強度を増した修復をしなければ意味がありません。しかし、災害復旧は現状復旧なんです。もとの姿にもどすという事です。それをいかにクリアして強度を増したものにするかと言う点ですね。

もう一つは、ある学説によると三陸から北海道東方に大地震が起きる可能性があると言います。それで国に対してこの地域を観測強化地域に指定をして頂いて、観測機器も増強してもらって予知体制を確立してもらいたいと考えます。

―― ではこの地震で教訓となったことは何ですか。

大矢 まず巨大地震にも対応できる防災計画の見直しです。そしてそれを運営する体制をもう一度洗い直して、しっかりしたものにしなければならないと思います。その中で最も大切な事は、正確な情報を速やかに察知し、迅速に市民に知らせると言う事だと思います。その一環として、3月中に供用が開始されますが、この半島地域31カ所に拡声器を設置し、本機を役所に置いた無線津波情報システムを整備します。1つの拡声器から400m四方へ声が届きますから、外で仕事をされている方

にも情報を提供することができるわけです。これですと情報を察知して、瞬時に知らせることが出来るはずです。

また、行政側としては職員の非常配備体制基準を明確化し、気象予・警報における職員の出動体制基準を定め、迅速な対応が出来るようにすることと、災害対策本部機能においては、各対策部において班の責任者を定め、任務分担が迅速かつ的確に機能できるようにするとともに、災害対策本部の下部組織として事務局を置き、各対策部からの班長等による組織を設置し、全体を把握できるシステムを確立しなければならないと考えます。

―― 一般市民の方々の防災意識はいかがですか。行政として指導・教育などはされていますか。

大矢 根室市総合防災訓練は5年に1回の割で大規模に行ってきていますし、防災関係各機関の訓練は毎年実施しております。

これからは5年に1回の訓練を3年毎にしようと取り決めていましたが、その訓練も今年からは今回の地震の体験を踏まえた上で、より効果的で、実態に則したものにしなければと考えますし、広報車によるPR等も回数、時間帯など見直す点があります。それと避難場所につきましても、これまでと違った見地から再検討する余地がありますね。これらを一つ一つ再検討し地道に続けることが大切だと思います。

―― 根室市は昭和48年の震災以来、防災システムの充実に向け努力されてきたようですが、東方沖地震にその効果があったとお考えですか。

大矢 あったと思います。根室の場合は22年前の根室半島地震以来、三陸沖地震、釧路沖地震など数多くの地震の洗礼を受けて来ておりますし、市民のみなさんもある程度地震に対する心構えが出来ております。

最も基本的なことですが、地震が起きたらまず火を消す、戸を開ける、無闇に外に飛び出さず冷静に状況判断し次の行動に移る、ということが今回の地震でも実行されたと思いますし、その結果が重傷者8名、軽傷42名、死亡ゼロという極めて小さな人的被害で納まったと思います。

今回不幸中の幸いだったのは、地震発生が夜の10時23分でしたが、停電が起きなかったということです。もし、停電が起きていたら、状況は違っていたと考えなければなりません。また、もし暴風雪の日だったら、夕食時で火を使っている家庭が多かったら、祭事などで一カ所に多くの人が集まっていたらと、悪条件が重なることもあるわけですから、先程の防災システムの再構築とさまざまな状況を想定した訓練などが必要になってくると思うのです。

地震はまだ完璧に予知することは出来ませんし、地震規模も毎回違うわけですから、官民一体となった防災システムづくりと、日頃の防災意識でその被害を最小限にくい止めていくことが大切だと考えます。

大矢 快治 おおや・かいじ
昭和3年1月3日生。
根室市出身、和田青年学校本科卒。
前職根室市助役、昭和61年9月根室市長就任、現在3期目。任期満了日10年9月28日。